

かのやうに

森 鷗外

朝小間使の雪が火鉢ひばちに火を入れに來た時、奥さんが不安らしい顔をして、「秀磨ひでまろの部屋にはゆうべも又電氣が附いてゐたね」と云つた。

「おや。さやうでございましたか。先つき瓦斯がすだんろ煖爐だんろに火を附けにまゐりました時は、明りはお消しになつて、お床の中で煙草たばこを召し上がつて入らつしやいました。」

雪は此返事このこたへをしながら、戸を開けて自分が這入はいつた時、大きい葉卷かまきりの火が、暗い部屋の、しんとしてゐる中で、ぼうつと明るくなつては、又微かすかになつてゐた事を思ひ出して、折々をりくあることではあるが、今朝もはつと思つて、「おや」と口に出さうであつたのを呑み込んだ、その瞬間しゆんかんの事を思ひ浮べてゐた。

「さうかい」と云つて、奥さんは雪が火を活いけて、大きい杵わく火鉢ひばちの中の、眞つ白い灰はいを綺麗きれいに、盛り上げたやうにして置いて、起たつて行くのを、矢張やはり不安な顔をして、見送みおく

つてゐた。邸やしきでは瓦斯がすが勝手にまで使つてあるのに、奥おくさんは逆さか上ぼせると云つて、炭火に當つてゐるのである。

電燈は邸ではどの寢間ねまにも夜どほし附つきいてゐる。併しかし秀麿は寢る時必ず消して寢る習慣を持つてゐるので、それが附つきいてゐれば、又徹夜して本を讀んでゐたと云ふことが分かる。それで奥おくさんは手水てうづに起きる度たびに、廊下から見て、秀麿のゐる洋室の窓すきの隙すきから、火の光の漏れるのを氣きにしてゐるのである。

秀麿は學習院から文科大學に這入つて、歴史科で立派に卒業した。卒業論文には、國史は自分が畢生ひつせいの事業として研究する積りであるのだから、苛いやしくも筆つを著つけたくないと云つて、古代印度史の中から、「迦膩色迦王かにかわうと佛典結集ぶつてんけつじふ」と云ふ題を選んだ。これは阿輸迦王あそかわうの事はこれ迄まで問題になつてゐて、此王の事がまだ研究してなかつたからである。併しかしこれまで特別にさう云ふ方面の研究をしてゐたのでないから、秀麿は一步一步非常な困難に撞つ著やくして、どうしてもこれはサンスクリットを丸で知らないでは、正確な判断は下されないと考へて、急たかくすに高楠博士たかすはくしの所へ駈かけ附つきけて、梵語研究ぼんごの手ほどきをして貰もらつた。併しかう云ふ學問はなかく急きふ拵じらへに出來る筈はずのものでないから、少しづつ分かつて來れば來る程、困難を増すばかりであつた。それでも屈かせず、選んだ問

かのやうに

題だけは、どうにかかうにか解決を附けた。自分ではひどく不満足に思つてゐるが、率直な、一切の修飾を卻けた秀磨の記述は、これまでの卒業論文には餘り類がないと云ふことであつた。

丁度此卒業論文問題の起つた頃からである。秀磨は別に病氣はないのに、元氣がなくなつて、顔色が蒼く、目が異様に赫みて、これまでも多く人に交際をしない男が、一層社交に遠ざかつて來た。五條家では、奥さんを始として、ひどく心配して、醫者に見せようとしたが、「わたくしは病氣なんぞはありません」と云つて、どうしても聽かない。奥さんは内證で青山博士が來た時尋ねて見た。青山博士は意外な事を問はれたと云ふやうな顔をして、かう云つた。

「秀磨さんですか。診察しなくちや、なんとも云はれませぬね。ふん。さうですか。病氣はないから、醫者には見せないと云ふのでしたつけ。さうかも知れませぬ。わたしなんぞは學生を大勢見てゐるのですが、少し物の出來る奴が卒業する前後には、皆あんな顔をしてゐますよ。毎年卒業式の時、側で見てゐますが、お時計を頂戴しに出て來る優等生は、大抵秀磨さんのやうな顔をしてゐて、卒倒でもしなければ好いと思ふ位です。も少しで神経衰弱になると云ふ所で、ならずには濟んでゐるのです。卒業さへしてしまへば直ります。」

奥さんもなる程さうかと思つて、強ひて心配を押しへ附けて、今に直るだらう、今に直るだらうと、自分で自分に暗示を與へるやうに努めてゐた。秀麿が目の前にゐない時は、青山博士の言つた事を、一句一句繰り返して味つてみて、「なる程さうだ、なんの秀麿に病氣があるものか、大丈夫だ、今に直る」と思つて見る。そこへ秀麿が蒼い顔をして出て来て、何か上の空で言つて、跡は黙り込んでしまふ。こつちから何か話し掛けると、實の入つてゐないやうな、責を塞ぐやうな返事を、詞の調子だけ優しくしてする。なんだか、こつちの詞は、子供が銅像に吹矢を射掛けたやうに、皮膚から弾き戻されてしまふやうな心持がする。それを見ると、切角青山博士の詞を基礎にして築き上げた樓閣が、覺束なくぐらついて來るので、奥さんは又心配をし出すのであつた。

秀麿は卒業後直に洋行した。秀麿と大した點數の懸隔もなく、優等生として銀時計を頂戴した同科の新學士は、文部省から派遣せられる筈なのに、現にヨオロッパにゐる一人が歸らなくては、經費が出ないので、それを待つてゐるうちに、秀麿の方は當主の五條子爵が先へ立たせてしまつた。子爵は財政が割合に豊かなので、嫡子に外國で學生並の生活をさせる位の事には、さ程困難を感じないからである。

洋行すると云ふことになつてから、餘程元氣附いて來た秀麿が、途中からよこした手

かのやうに

紙も、ベルリンに著いてからのもの、總ての周圍の物に興味を持つてゐて書いたものらしく見えた。印度の港で魚のやうに波の底に潜つて、銀錢を拾ふ黒ん坊の子供の事や、ポルトセエドで上陸して見たと云ふ、ステレオタイプな笑顔の女藝人が種々の樂器を奏する國際的團體の事や、マルセイユで始て西洋の町を散歩して、嘘と云ふものを衝かぬ店で、掛値と云ふもののない品物を買つて、それを持つて歸らうとして、紳士がそんな物をぶら下げてお歩きにならなくても、こちらからお宿へ届けると云はれ、頼んで置いて歸つて見ると、品物が先へ届いてゐた事や、それからパリイに滞在してゐて、或る同族の若殿に案内せられてオペラを見に行つた時、フオアイエエで立派な貴夫人が來て何か云ふと、若殿がつつけんどんに、わたし共はフランス語は話しませんと云つて置いて、自分が呆れた顔をしたのを見て女に聞えたかと思ふ程大きい聲をして、「Tout ce qui brille, n'est pas or」と云つたので、始てなる程と悟つた事や、それからベルリンに著いた當時の印象を瑣細な事まで書いてあつて、子爵夫婦を面白がらせた。子爵は奥さんに三省堂の世界地圖を一枚買つて渡して、電報や手紙が來る度に、鉛筆で點を打つたり線を引きたりして、秀麿はこゝに著いたのだ、こゝを通つてゐるのだと言つて聞かせた。

ヨオロツパではベルリンに三年ゐた。その三年目がエエリヒ・シユミット總長の下に、大學の三百年祭をする年に當つたので、秀麿も鐔の嵌まつた松明を手を持つて、松明行

列の仲間に入つて、ベルリンの町を練つて歩いた。大學にゐる間、秀麿は此期にはこれ／＼の講義を聴くと云ふことを、精しく子爵の所へ知らせてよこしたが、その中にはイタリア復興時代とか、宗教革新の起原だとか云ふやうな、歴史その物の講義と、史的研究の原理と云ふやうな、抽象的な史學の講義とがあるかと思ふと、民族心理學やら神話成立やらがある。プラグマチスムスの哲學史上の地位と云ふのがある。或る助教授の受け持つてゐるフリードリヒ・ヘツベルと云ふ文藝史方面のものがある。ずつと飛び離れて、神學科の寺院史や教義史がある。學期ごとにこんな風で、専門の學問に手を出した事のない子爵には、どんな物だか見當の附かぬ學科さへあるが、兎に角随分雜駁な學問のしやうをしてゐるらしいと云ふ事丈は判断が出来た。併し子爵はそれを苦にもしない。息子を大學に入れたり、洋行をさせたりしたのは、何も専門の職業がさせたいからの事ではない。追つて家督相續をさせた後に、恐多いが皇室の藩屏になつて、身分相應な働きをして行くのに、基礎になる見識があつてくれれば好い。その爲めに普通教育より一段上の教育を受けさせて置かうとした。だから本人の氣の向く學科を、勝手に選んでさせて置いて好いと思つてゐるのであつた。

ベルリンにゐる間、秀麿が學者の噂をしてよこした中に、エエリヒ・シユミツトの文才や辯説も度々褒めてあつたが、それよりも神學者アドルフ・ハルナツクの事業や勢力

かのやうに

がどんなものだと言ふことを、繰り返してお父うさんに書いてよこしたのが、どうも特別な意味のある事らしく、歸つて顔を見て、土産話みやげばなしにするのが待ち遠いので、手紙でお父うさんに飲み込ませたいとでも云ふやうな熱心が文章の間に見えてゐた。殊ことに大學の三百年祭の事を知らせてよこした時なんぞは、秀麿はハルナツクをこの目覺めざましい祭の中心人物として書いて、キルヘルム第二世とハルナツクとの君臣くんしんの間柄は、人主じんしゅが學者を信用し、學者が獻身的態度を以て學術界もつに貢獻しながら、同時に君國くんこくの用をなすと云ふ方面から見ると、模範的だと云つて、ハルナツクが事業の根柢こんていをはつきりさせる爲めに、とう／＼父テオドジウスの事にまで溯さかのぼつて、精しく新教神學發展の跡を辿たどつて述べてゐた。自分の専門だと云つてゐる歴史の事に就いても、こんなに力を入れて書いてよこしたことはないのに、どうしてハルナツクの事ばかりを、特別に言つてよこすのだらうと子爵は不審に思つて、此手紙だけ念を入れて、度々讀み返して見た。そしてその手紙の要點を掴つかまへようとなつた。手紙の内容を約めて見れば、かうである。政治は多數を相手にした爲事しごとである。それだから政治をするには、今でも多數を動かしてゐる宗教に重きを置かなくてはならない。ドイツは内治ないちの上では、全く宗教を異ことにしてゐる北と南とを擣つきくるめて、人心の歸嚮きかうを操あやつつて行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜してゐるとは云へ、まだ深い根柢を持つてゐるロオマ法王を

計算の外ほかに置くことは出来ない。それだからドイツの政治は、舊教の南ドイツを逆さかはな
いやうに抑おさへてゐて、北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀はかつて行かなくてはなら
ない。それには君主が宗教上の、しつかりした基礎を持つてゐなくてはならない。そ
の基礎が新教神學に置いてある。その新教神學を現に代表してゐる學者はハルナツク
である。さう云ふ意味のある地位に置かれたハルナツクが、少しでも政治の都合の好
やうに、神學上の意見を曲げてゐるかと思ふに、そんな事はしてゐない。君主もそんな
事をさせようとはしてゐない。そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽
をのして、息張いばつてゐることが出来る。それで今のやうな、社會民政黨の跋扈ぼつこしてゐる
時代になつても、キルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍從武官じじゆうぐわんと自動車に相乗をし
て、ぶつぷと喇叭らつぱを吹かせてベルリン中を駈け歩いて、出し抜に展覽會を見物しに行つ
たり、店へ買物をしに行つたりすることが出来るのである。ロシアとでも比べて見るが
好い。グレシア正教せいけうの寺院を沈滞せんとの儘ままに委まかせて、上邊うへを眞綿まゐにくるむやうにして、そつ
として置いて、黔首けんしゆを愚ぐにするとでも云ひたい政治をしてゐる。その愚にせられた黔首
が少しでも目を醒さますと、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服へいふくを著きた警
察官かきが垣かきを結ゆつたやうに立つてゐる間までなくては歩かれないのである。一體宗教を信
ずるには神學はいらぬ。ドイツでも、神學を修めるのは、牧師になる爲め、ちよつ

かのやうに

と思ふと、宗教界に籍を置かないものには神學は不用なやうに見える。併し學問などをしない、智力の發展してゐない多數に不用なのである。學問をしたものには、それが有用になつて来る。原來學問をしたものには、宗教家の謂ふ「信仰」は無い。さう云ふ人、即ち教育があつて、信仰のない人に、單に神を尊敬しろ、福音を尊敬しろと云つても、それは出来ない。そこで信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる。さう云ふ人は危険思想家である。中には實際は危険思想家になつてゐながら、信仰のないのに信仰のある眞似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めてゐる眞似をしてゐる。實際この眞似をしてゐる人は随分多い。そこでドイツの新教神學のやうな、教義や寺院の歴史をしつかり調べたものが出来てゐると、教育のあるものは、志さへあれば、専門家の綺麗に洗ひ上げた、滓のこびり付いてゐない教義をも覗いて見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしないまでも、宗教の必要丈は認めるやうになる。そこで穩健な思想家が出来る。ドイツにはかう云ふ立脚地を有してゐる人の數がなか／＼多い。ドイツの強みが神學に基づいてゐると云ふのは、ここにある。秀膺はかう云ふ意味で、ハルナツクの人物を稱讚してゐる。子爵にも手紙の趣意はおほよそ呑み込めた。西洋事情や輿地誌略の盛んに行はれてゐた時代に人となつて、翻譯書で當用を辨ずることが出来、華族仲間で口が利かれる程度に、自分を養成した丈の子爵は、精神上

の事には、朱子しゆしの註ちゆうに據よつて論語を講釋するのを聞いたより外ほか、なんの智識もないのだが、頭の好い人なので、これを讀んだ後のちに内々なかく自ら省かへりみて見た。倅せがれの手紙にある宗教と云ふのはクリスト教で、神と云ふのはクリスト教の神である。そんな物は自分とは全く没交渉である。自分の家には昔から菩提所ぼだいじよに定さだまつてゐる寺があつた。それを維新の時、先代ほとんが殆ど縁を切つたやうにして、家の葬祭さうさいを神官に任せてしまつた。それから佛ほとけと云ふものとも、全く没交渉になつて、今は祖先の神靈しんれいと云ふものより外、認めてゐない。現に邸内にも祖先を祭つた神社丈はあつて、鄭重ていぢゆうな祭をしてゐる。ところが、その祖先の神靈が存在してゐると、自分は信じてゐるだらうか。祭をする度に、祭るに在いますが如ごとくすと云ふ論語の句が頭に浮ぶ。併しそれは祖先が存在してゐられるやうに思つて、お祭をしなくてはならないと云ふ意味で、自分を顧かへりみて見るに、實際存在してゐられると思ふのではないらしい。ゐられるやうに思ふのでもないかも知れない。ゐられるやうに思はうと努力するに過ぎない位ではあるまいか。さうして見ると、倅せがれの謂いふ、信仰がなくて、宗教の必要丈を認めると云ふ人の部類に、自分は這入つてゐるものと見える。いや／＼。さうではない。倅の謂ふのは、神學でも覗いて見て、これ丈の教義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判断した上で認めることである。自分は神道の書物などを覗いて見たことはない。又自分の覗いて見ら

かのやうに

れるやうな書物があるか、どうだか、それさへ知らずにゐる。そんならと云つて、教育のない、信仰のある人が、直覺的に神靈の存在を信じて、その間にあひだなんの疑うたがひをも挿さしはさまないのとも違ふから、自分の祭をしてゐるのは形式丈で、内容がない。よしや、在いますが如く思はうと努力してゐても、それは空虚な努力である。いや／＼。空虚な努力と云ふものはありやうがない。そんな事は不可能である。さうして見ると、教育のない人の信仰が遺傳して、微かすかに残つてゐるとでも思はなくしてはなるまい。併しこれは倅の考へるやうに、教育が信仰を破壊すると云ふことを認めた上の話である。果してさうであらうか。どうもさうかも知れない。今の教育を受けて神話と歴史とを一つにして考へてゐることは出来まい。世界がどうして出来て、どうして發展したか、人類がどうして出来て、どうして發展したかと云ふことを、學問に手を出せば、どんな淺い學問の爲方しかたをして、何かの端々はしくで考へさせられる。そしてその考へる事は、神話を事實として見させては置かない。神話と歴史とをはつきり考へ分けると同時に、先祖ほかその外の神靈の存在は疑問になつて來るのである。さうなつた前途には恐ろしい危険が横よこたはつてゐはずまいか。一體世間の人はこんな問題をどう考へてゐるだらう。昔の人が眞實だと思つてゐた、神靈の存在を、今の人が嘘だと思つてゐるのを、世間の人は當り前だとして、平氣でゐるのではあるまいか。随したがつてあらゆる祭やなんぞが皆内容のない

形式になつてしまつてゐるのも、同じく當り前だとしてゐるのではあるまいか。又子供に神話を歴史として教へるのも、同じく當り前だとしてゐるのではあるまいか。そして誰も誰も、自分は神話と歴史とをはつきり別にして考へてゐながら、それをわざと擣き交せて子供に教へて、怪まずにゐるのではあるまいか。自分は神靈の存在なんぞは少しも信仰せずに、唯俗に従つて聊復爾り位の考で糊塗して遣つてゐて、その風俗、即ち昔神靈の存在を信じた世に出來て、今神靈の存在を信ぜない世に残つてゐる風俗が、いつまで現状を維持してゐようが、いつになつたら滅亡してしまはうが、そんな事には頓著しないのではあるまいか。自分が信ぜない事を、信じてゐるらしく行つて、虚偽だと思つて疚しがりもせず、それを子供に教へて、子供の心理状態がどうならうと云ふことさへ考へても見ないのではあるまいか。倅は信仰はなくても、宗教の必要を認めると云ふことを言つてゐる。その必要を認めなくてはならないと云ふこと、その必要を認める必要を、世間の人は思つても見ないから、どうしたら神話を歴史だと思はず、神靈の存在を信ぜずに、宗教の必要が現在に於いて認めてゐられるか、未來に於いて認めて行かれるかと云ふことなんぞを思つて見やうもなく、一切無頓著でゐるのではあるまいか。どうも世間の教育を受けた人の多數は、こんな物ではないかと推察せられる。無論此多數の外に立つて、現今の頽勢を挽回しようとしてゐる人はある。さう云

ふ人は、倅の謂ふ、單に神を信仰しろ、福音を信仰しろと云ふ類である。又それに雷同してゐる人はある。それは倅の謂ふ、眞似をしてゐる人である。これが頼みにならうか。更に反對の方面を見ると、信仰もなくしてしまひ、宗教の必要をも認めなくなつてしまつて、それを正直に告白してゐる人のあることも、或る種類の人の言論に徴して知ることが出来る。倅はさう云ふ人は危険思想家だと云つてゐるが、危険思想家を嗅ぎ出すことに骨を折つてゐる人も、こつちでは存外そこまでは氣が附いてゐないらしい。實際こつちでは、治安妨害とか、風俗壞亂とか云ふ名目の下に、そんな人を羅致した實例を見たことがない。併しかう云ふことを洗立をして見た所が、確とした結果を得ることはむづかしくはあるまいか。それは人間の力の及ばぬ事ではあるまいか。若しさうだと、その洗立をするのが、世間の無頓著よりは危険ではあるまいか。倅もその危険な事に頭を衝つ込んでゐるのではあるまいか。倅は専門の學問をしてゐるうちに、ふとさう云ふ問題に觸れて、自分も不安になつたので、己に手紙をよこしたかも知れぬ。それとも此問題にひどく重きを置いてゐるのだらうか。

五條子爵は秀麿の手紙を讀んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざつとこれ丈の事を考へた。併しそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の満足する丈の解決が出来さうにもなく、倅の歸つて來る時期も近づいてゐるので、それまで待つて

も好いと思つて、返信は別に宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穩健な思想を養つて、國家の用に立つ人物になつて歸つてくれとしか云つて遣らなかつた。そこで秀麿の方でも、お父うさんにどれ丈自分の言つた事が分かつたか知らずにゐた。

秀麿は平生丁度その時思つてゐる事を、人に話して見たり、手紙で言つて遣つて見たりするが、それをその人に是非十分飲み込ませようともせず、人を自説に轉せさせよう、服させようともしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分で自分の思想をはつきりさせて見て、そこに満足を感じず。そして自分の思想は、又新しい刺戟を受けて、別な方面へ移つて行く。だからあの時子爵が精しい返事を遣つたところで、秀麿はもう同じ問題の上で、お父うさんの満足するやうな事を言つてはよこさなかつたかも知れない。

洋行をさせる時健康を氣遣つた秀麿が、旅に出ると元氣になつたらしく、筆まめに書いてよこす手紙にも生々した様子が見え、ドイツで秀麿と親しくしたと云つて、歸つてから尋ねて來る同族の人も、秀麿は随分勉強をしてゐるが、玉も衝けば氷滑りもすると云ふ風で、上流の人を相手にして開いてゐる、某夫人のパンジオナートでは、若い男

女の寄宿人が、芝居の初興行をでも見に行くとき、キコント五條が一しよでなくては面白くないと云ふ程だと話して聞せるので、子爵夫婦は喜んで、早く丈夫な男になつて歸つて來るのを見たいと思つてゐた。

秀麿は去年の暮に、書物をむやみに澤山持つて、歸つて來た。洋行前にはまだどこやら少年らしい所のあつたのが、三年の間にすっかり男らしくなつて、血色も好くなり、肉も少し附いてゐる。併し待ち構へてゐた奥さんが氣を附けて様子を見ると、どうも物の言振が面白くないやうに思はれた。それは大學を卒業した頃から、西洋へ立つ時迄の、何か物を案じてゐて、好い加減に人に應對してゐると云ふやうな、沈黙勝な會話振が、定めてすつかり直つて歸つたことと思つてゐたのに、歸つた今も矢張立つ前と同じやうに思はれたのである。

新橋へ著いた日の事であつた。出迎をした親類や心安い人の中には、邸まで附いて來たのもあつて、五條家ではさう云ふ人達に、一寸した肴で酒を出した。それが濟んだ跡で、子爵と秀麿との間に、こんな對話があつた。

子爵は袴を著けて据わつて、刻煙草を煙管で飲んでゐたが、瘦せた顔の目の縁に、皺を澤山寄せて、嬉しげに息子をちつと見て、只一言「どうだ」と云つた。

「はい」と父の顔を見返しながら秀麿は云つたが、傍で見てゐる奥さんには、その立

派な洋服姿が、どうも先つき客の前で勤めてゐた時と變らないやうに、少しも寛いだ様子がないやうに思はれて、それが氣に掛かつた。

子爵は息子がまだ何か云ふだらうと思つて、暫く黙つてゐたが、それ切りなんとも云はないので、詞を續いだ。「書物を澤山持つて歸つたさうだね。」

「こつちで爲事をするのに差支へないやうにと思つて、中には讀んで見る方の本でない、物を捜し出す方の本も買つて歸つたものですから、嵩が大きくなりました。」

「ふん。早く爲事に掛かりたからうなあ。」

秀麿は少し返事に躊躇するらしく見えた。「それは舟の中でも色々考へて見ましたが、どうも當分手が著けられさうもないのです。」かう云つて、何か考へるやうな顔をしてゐる。

「急ぐ事はない。お前のは賣らなくてはならんと云ふのでもなし、學位が欲しいと云ふのでもないからな。」一旦かうは云つたが、子爵は更に、「學位は貰つても悪くはないが」と言ひ足して笑つた。

こゝまで傍聴してゐた奥さんが、待ち兼ねたやうに、いろ／＼な話をし掛けると、秀麿は優しく受答をしてゐた。此時奥さんは、どうも秀麿の話は氣乗がしてゐない、附合に物を言つてゐるやうだと云ふ第一印象を受けたのであつた。

かのやうに

それで秀麿が座を立つた跡で、奥さんが子爵に言った。「體は大層好くなりましたが、なんだかかう控へ目に、考へく物を言ふやうではございませんか。」

「それは大人おとなになつたからだ。男と云ふものは、奥さんのやうに口から出任せに物を言つては行けないのだ。」

「まあ。」奥さんは目を睜みはつた。四十代が半分過ぎてゐるのに、まだばつちりした、可哀かわいらしい目をしてゐる女である。

「おこつては行けない。」

「おこりなんかしませんわ」と云つて、奥さんはちよいと笑つたが、秀麿の返事より、此笑わらひの方が附合らしかつた。

その時からもう一年近く立つてゐる。久し振の新年も迎へた。秀麿は位階があるの
で、お父う様程忙ぶじやうしくはないが、幾分か儀式らしい事もしなくてはならない。新調査
た禮服を著て、不精ぶじやうらしい顔をせず、それを濟ませた。「西洋のお正月はどんなだつ
たえ」とお母あ様が問ふと、秀麿は愛想好く笑ふ。「一向駄目ですね。學生は料理屋へ
大晦日おほみそかの晩から行つてゐまして、ボオレと云つて、シヤンパンに葡萄酒ぶどうしゆに砂糖に炭酸水
と云ふやうに、いろく交せて温めて、レモンを輪切にして入れた酒を拵こしらへて、夜なか

になるのを待つてゐます。そして十二時の時計が鳴り始めると同時に、さあ新年だと云ふので、その酒を注いだ杯をてんでんに持つて、こつ／＼打ち附けて、プロジツト・ノイヤアルと大聲で呼んで飲むのです。それからふざけながら町を歩いて歸ると、元日には寝てゐて、午まで起きはしません。町でも家は大抵戸を締めて、ひっそりしてゐます。まあ、クリスマスにお祭らしい事はしてしまつて、新年の方はお留守になつてゐるやうなわけです」と云ふ。「でもお上のお儀式はあるだらうね。」「それはございますやうです。拜賀が午後二時だとか云ふことでした。」こんな風に、何事につけても人が問へば、ヨオロッパの話もするが、自分から進んで話すことはない。

二三月の一番寒い頃も過ぎた。お母あ様が「向うはこんな事ではあるまいね」と尋ねて見た。「それはグラツトアイスと云つて、寒い盛りに一寸温かい晩があつて、積つた雪が上融をして、それが朝氷つてゐることがあります。木の枝は硝子で包んだやうになつてゐます。ベルリンのウンテル・デン・リンデンと云ふ大通りの人道が、少し凸凹のある鏡のやうになつてゐて、滑つて歩くことが出来ないで、人足が沙を入れた籠を腋に抱へて、蒔いて歩いてゐます。さう云ふ時が一番寒いのですが、それでもロシアのやうに、町を歩いてゐて鼻が腐るやうな事はありません。煖爐のない家もないし、毛皮を著ない人もない位ですから、寒さが體には徹へません。こちらでは夏座敷に住んで、

かのやうに

夏の支度をして、寒がつてゐるやうなものですな。」秀麿はこんな話をした。

櫻の咲く春も過ぎた。お母あ様に櫻の事を問はれて、秀麿は云つた。「ドイツのやうな寒い國では、春が一どきに來て、何の花も一しよに咲きます。美しい五月と云ふ詞があります。櫻の花もないことはありませんが、あつちの人は櫻と云ふ木は櫻ん坊のなる木だとばかり思つてゐますから、花見はいたしません。ベルリンから半道ばかりの、ストララウと云ふ村に、スプレエ川の岸で、櫻の澤山植ゑてある所があります。そこへ日本から行つてゐる學生が揃つて、花見に行つたことがありますよ。絨緞を織る工場の女工なんぞが通り掛かつて、あの人達は木の下で何をしてゐるのだらうと云つて、驚いて見てゐました。」

暑い夏も過ぎた。秀麿はお母あ様に、「ベルリンではこんな日にどうしてゐるの」と問はれて、暫く頭を傾けてゐたが、とう／＼笑ひながら、かう云つた。「一番詰まらない季節ですね。誰も彼も旅行してしまひます。若い娘なんぞがスエツツルに行つて、高山に登ります。跡に残つてゐる人は爲方がないので、公園内の飲食店で催す演奏會へでも往つて、夜なかまで涼みます。大ぶ北極が近くなつてゐる國ですから、そんなにして遊んで歸つて、夜なかを過ぎて寝ようとすると、もう窓が明るくなり掛かつてゐます。」
彼此するうちに秋になつた。「ヨオロッパでは寒さが早く來ますから、こんな秋日和の

味は味あぢはふことが出来ませんね」と、秀麿は云つて、お母あ様に對して、ちよつと愉快げな笑顔えがほをして見せる。大抵こんな話をするのは食事の時位で、その外の時間には、秀麿は自分の居間になつてゐる洋室に籠こもつてゐる。西洋から持つて來た書物が多いので、本箱なんぞでは間に合はなくなつて、此一間丈壁ひとまに悉く棚たなを取り附けさせて、それへ一ぱい書物を詰め込んだ。棚の前には薄い緑色の幕を引かせたので、一種の裝飾になつたが、壁がこれまでの倍以上の厚さになつたと同じわけだから、室内が餘程暗くなつて、それと同時に、一間が外より物音の聞えない、しんとした所になつてしまつた。小春の空が快く晴れて、誰も彼もたれかれも出歩く頃になつても、秀麿はこのしんとした所に籠こもつて、卓テエプルの傍そばを離れずに本を讀んでゐる。窓の明りが左手から斜ななめに差し込んで、緑の羅紗らしやの張つてある上を半分明るくしてゐる卓である。

此秋は暖いくと云つてゐるうちに、稀まれに降る雨がいつか時雨しぐれめいて來て、もう二三日前から、秀麿の部屋のフウベン形の瓦斯がすだんろ煖爐にも、小間使の雪が來て點火することになつてゐる。

朝起きて、庭の方へ築つき出してある小さいエランダへ出て見ると、庭には一面に、大きい黄いろい梧桐ごとうの葉と、小さい赤い山もみぢの葉とが散らばつて、エランダから庭へ

かのやうに

降りる石段の上まで、殆ど隙間もなく彩つてゐる。石垣に沿うて、露に濡れた、老縁の
ひろは
廣葉を茂らせてゐる八角全盛が、所々に白い莖を、枝のある燭臺のやうに抽き出して、
白い花を咲かせてゐる上に、薄曇の空から日光が少し漏れて、雀が二三羽鳴きながら飛
び交はしてゐる。

秀磨は暫く眺めてゐて、両手を力なく垂れた儘で、背を反らせて伸びをして、深い息
を衝いた。それから部屋に這入つて、洗面卓の傍へ行つて、雪が取つて置いた湯を使つ
て、背廣の服を引つ掛けた。洋行して歸つてからは、いつも洋服を着てゐるのである。

そこへお母様が這入つて來た。「けふは日曜だから、お父う様は少しゆつくりして
入らつしやるのだが、わたしはもう御飯を戴くから、お前もおいででないか。」かう云
つて、息子の顔を横から覗くやうに見て、詞を續けた。「ゆうべも大層遅くまで起きて
ゐましたね。いつも同じ事を言ふやうですが、西洋から歸つてお出の時、あんなに體
が好かつたのに、餘り勉強ばかりして、段々顔色を悪くしておしまひなのね。」

「なに。體はどうもありません。外へ出ないでゐるから、日に焼けないのでせう。」笑
ひながら云つて、一しよに洋室を出た。

併し奥さんにはその笑聲が胸を刺すやうに感ぜられた。秀磨が心からでなく、人に
めつぶ
目潰しに何か投げ附けるやうに笑聲をあびせ掛ける習癖を、自分も意識せずに、いつの

間にか養成してゐるのを、奥さんは本能的に知つてゐるのである。

食事をしまつて歸つた時は、明方に薄曇のしてゐた空がすつかり晴れて、日光が色々に邪魔をする物のある秀麿の室を、物見高い心から、依怙地に覗かうとするやうに、窓帷のへりや書棚のふちを彩つて、卓の上に幅の廣い、明るい帶をなして、インク壺を光らせたり、床に敷いてある絨氈の空想的な花模様、利那の性命を與へたりしてゐる。そんな風に、日光の差し込んでゐる處の空氣は、黄いろに染まり掛かつた青葉のやうな色をして、その中には細かい塵が躍つてゐる。

室内の温度の餘り高いのを喜ばない秀麿は、煖爐のコックを三分一程閉ぢて、葉巻を銜へて、運動椅子に身を投げ掛けた。

秀麿の心理状態を簡單に説明すれば、無聊に苦んでゐると云ふより外はない。それも何事もすることの出来ない、低い刺戟に饑ゑてゐる人の感ずる退屈とは違ふ。内に眠つてゐる事業に壓迫せられるやうな心持である。潜勢力の苦痛である。三國時代の英雄は髀に肉を生じたのを見て歎じた。それと同じやうに、餘所目には瘦せて血色の悪い秀麿が、自己の力を知覺してゐて、脳髓が醫者の謂ふ無動作性萎縮に陥らねば好いかと憂へてゐる。そして思量の體操をする積りで、哲學の本なんぞを讀み耽つてゐるのである。お母あ様程には、秀麿の健康状態に就いて悲觀してゐない父の子爵が、いつだつた

かのやうに

か食事の時息子を顧みて、「二肚皮時宜に合はずかな」と云つて、意味ありげに笑つた。秀麿は例の笑を顔に湛へて、「僕は不平家ではありません」と答へた。どうもお父う様はこつちが極端な自由思想をでも持つてゐはしないかと疑つてゐるらしい。それは誤解である。併し流石男親丈にお母あ様よりは、切實に少くもこつちの心理状態の一面を解してゐてくれるやうだと、秀麿は思つた。

秀麿は父の詞を一つ思ひ出したのが機縁になつて、今一つの父の詞を思ひ出した。それは又或る日食事をしてゐる時の事で、「どうも人間が猿から出来たなんぞと思つてゐられては困るからな」と云つた。秀麿はぎくりとした。秀麿だつて、ヘツケルのアントロポゲニイに連署して、それを自分の告白にしても好いとは思つてゐない。併しお父う様の此詞の奥には、こつちの思想と相容れない何物かが潜んでゐるらしい。まさかお父う様だつて、草昧の世に一國民の造つた神話を、その儘歴史だと信じてはゐられまいが、うかと神話が歴史でないと言ふことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るやうに物質的思想が這入つて来て、船を沈没させずには置かないと思つてゐられるのではあるまいか。さう思つて知らず識らず、頑冥な人物や、假面を被つた思想家と同じ穴に陥いつてゐられるのではあるまいかと、秀麿は思つた。

かう思ふので、秀麿は父の誤解を打ち破らうとして進むことを躊躇してゐる。秀麿

が爲めには、神話が歴史でないと云ふことを言明することは、良心の命ずるところである。それを言明しても、果物が堅實な核を藏してゐるやうに、神話の包んでゐる人生の重要な物は、保護して行かれると思つてゐる。彼を承認して置いて、此を維持して行くのが、學者の務だと云ふばかりではなく、人間の務だと思つてゐる。

そこで秀麿は父と自分との間に、狭くて深い谷があるやうに感ずる。それと同時に、父が自分と話をする時、危険な物の這入つてゐる疑のある箱の蓋を、そつと開けて見ようとしては、その手を又引つ込めてしまふやうな態度に出るのを見て、齒痒いやうにも思ひ、又氣の毒だから、いたはつて、手を出させずに置かなくてはならないやうにも思ふ。父が箱の蓋を取つて見て、白晝に鬼を見て、毒でもなんでもない物を毒だと思つて怖れるよりは、箱の内容を疑はせて置くのが、まだしもの事かと思ふ。

秀麿のかう思ふのも無理は無い。明敏な父の子爵は秀麿がハルナツクの事を書いた手紙を見て、それに對する返信を控へて置いた後に、寢られぬ夜などには度々宗教問題を頭の中で繰り返して見た。そして思へば思ふ程、此問題は手の附けられぬものだと云ふ意見に傾いて、随つてそれに手を著けるのを危険だと見るやうになつた。そこで兎に角、倅にそんな問題に深入をさせたくない。ならう事なら、倅の思想が他の方面に向くやうにしたい。さう思ふので、自分からは宗教問題の事などは決して言ひ出さない。

かのやうに

そしてこの問題が俸の頭にどれ丈の根を卸してゐるかとあやぶんで、竊に様子を覗うやうにしてゐるのである。

秀麿と父との對話が、ヨオロツパから歸つて、もう一年にもなるのに、兎角對陣してゐる兩軍が、雙方から斥候を出して、その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃して還るやうに、はかぐしい衝突もせぬ代りに、平和に打ち明けることもなくてゐるのは、かう云ふわけである。

秀麿の銜へてゐる葉卷の白い灰が、大ぶ長くなつて持つてゐたのが、とう／＼折れて、運動椅子に倚り掛かつてゐる秀麿のチョツキの上に、細い鱗のやうな破片を留めて、絨緞の上に落ちて碎けた。今のやうに何もせずとゐると、秀麿はいつも内には事業の壓迫と云ふやうな物を受け、外には家庭の空氣の或る緊張を覺えて、不快である。

秀麿は「又本を讀むかな」と思つた。兼ねて生涯の事業にしようとして企てた本國の歴史を書くことは、どうも神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない。寧ろ先づ神話の結成を學問上に綺麗に洗ひ上げて、それに伴ふ信仰を、教義史體にはつきり書き、その信仰を司祭的に取り扱つた機關を寺院史體にはつきり書く方が好きさうだ。さうしたつてプロテスタント教がその教義史と寺院史とで毀損せられないと同じ事で、祖先崇拜の教義や機關も、特にそのために危害を受ける筈はない。これ丈の事を

完成するのは、極て容易だと思ふと、もうその平明な、小ぎつぱりした記載を目の前に見るやうな氣がする。それが濟んだら、安心して歴史に取り掛られるだらう。併しそれを敢てする事、その目に見えてゐる物を手に取る事を、どうしても周圍の事情が許さうにないと云ふ認識は、ベルリンでそろ／＼故郷へ歸る支度に手を著け始めた頃から、段々に、或る液體の中に浮んだ一點の塵を中心にして、結晶が出来て、それが大きくなるやうに、秀麿の意識の上に形づくられた。これが秀麿の腦髓の中に蟠結してゐる暗黒な塊で、秀麿の企ててゐる事業は、此塊に礙げられて、どうしても發展させるわけに行かないのである。それで秀麿は製作的方面の脈管を總て塞いで、思量の體操として本だけ讀んでゐる。本を讀み出すと、秀麿は不思議に精神をそこに集注することが出来て、事業の壓迫をも感ぜず、家庭の空氣の緊張をも感ぜないでゐる。それで本ばかり讀んでゐることになるのである。

「又本を讀むかな」と秀麿は思つた。そして運動椅子から身を起した。

丁度その時こつ／＼と戸を叩いて、秀麿の返事をするのを待つて、雪が這入つて來た。小さい顔に、くり／＼した、漆のやうに黒い目を光らして、小さくて鋭く高い鼻が少し仰向いてゐるのが、ひどく可哀らしい。秀麿が歸つた當座、雪はまだ西洋室で用をしたことがなかつたので、開けた戸を、内からしやがんで締めて、絨緞の上に手を衝い

て物を言つた。秀麿は驚いて、笑顔をして西洋室での行儀を教へて遣つた。なんでも一度言つて聞せると、しつかり覺えて、その次の度からは慣れたものゝやうにするのである。

煖爐を背にして立つて、戸口を這入つた雪を見た秀麿の顔は晴やかになつた。エロチツクの方面の生活の丸で隕つてゐる秀麿が、平和ではあつても陰氣な此家で、心から爽快を覺えるのは、この小さい小間使を見る時ばかりだと云つても好い位である。

「綾小路さんが入らつしやいました」と、雪は籠の中の小鳥が人を見るやうに、くりくりした目の瞳を秀麿の顔に向けて云つた。雪は若檀那様に物を言ふ機會が生ずる度に、胸の中で凱歌の聲が起る程、無意味に、何の欲望もなく、秀麿を崇拜してゐるのである。

此時雪の締めて置いた戸を、廊下の方からあら／＼しく開けて、茶の天鷲絨の服を著た、秀麿と同年位の男が、驅け込むやうに這入つてきて、行きなり雪の肩を、太つた赤い手で押へた。「おい、雪。若檀那の顔ばかり見てゐて、取次をするのを忘れては困るぢやないか。」

雪の顔は眞つ赤になつた。そして逃げるやうに、黙つて部屋を出て行つた。綾小路の方は振り返つても見なかつたのである。

秀麿の眉間みけんには、注意して見なくては見えない程の皺しわが寄つたが、それが又注意して見ても見えない程早く消えて、顔の表情は極眞面目ごくまじめになつてゐる。「君詰まらない笑談げうだんは、僕の所で丈はよしてくれ給へ。」

「劈頭へきとう第一に小言を食はせるなんぞは驚いたね。氣持の好い天氣だぜ。君の内の親玉なんぞは、秋晴しゅうせいとかなんとか云ふのだらう。尤もセゾンはもう冬かも知れないが、過渡時代には、冬の日になつたり、秋の日になつたりするのだ。けふはまだ秋だとして置くね。どこか底の方に、ぴりつとした冬の分子が潜んでゐて、夕日が沈み掛かつて、かつと照るやうな、悲哀を帯びて爽快な處がある。まあ、年増としまの美人のやうなものだね。こんな日に鼯鼠もぐらもちのやうになつて、内に引つ込んで、本を讀んでゐるのは、世界は廣いが、先づ君位なものだらう。それでも机の上に俯ふさつてゐなかつた丈を、僕は褒めて置くね。」

秀麿は眞面目ではあるが、厭いやがりもしないらしい顔をして、盛んに饒舌しゃべり立ててゐる綾小路の様子を見てゐる。簡單に言へば、此男には餓鬼がき大將と云ふ表情がある。額際ひたひぎはから顛頂ろちやうへ掛けて、少し長めに刈つた髪を眞つ直に背後うしろへ向けて掻かき上げたのが、日本畫にかく野猪のしの毛のやうに逆立さかだつてゐる。細い目のちよいと下がつた目尻めじりに、嘲笑てうせふ的な微笑を湛たへて、幅廣く廣げた口を圍むやうに、左右の頬に大きい括弧くわつこに似た、

かのやうに

深い皺を寄せてゐる。

綾小路はまだ饒舌る。「そんなに僕の顔ばかり見給ふな。心中大いに僕を輕侮してゐるのだらう。好いぢやないか。君がロアで、僕がブッフオンか。ドイツ語でホオフナルと云ふのだ。陛下の倡優を以て遇する所か。」

秀麿は覺えず噴き出した。「僕がそんな侮辱的な考をするものか。」

「そんなら頭からけんつくなんぞを食はせないが好い。」

「うん。僕が悪かつた。」秀麿は葉卷の箱の蓋を開けて勸めながら、獨語のやうにつぶやいた。「僕は人の空想に毒を注ぎ込むやうに感じるものだから。」

「それがサンチマンタルなのだよ」と云ひながら、綾小路は葉卷を取つた。秀麿はマツチを摩つた。

「メルシイ」と云つて綾小路が吸ひ附けた。

「暖かい所が好からう」と云つて、秀麿は椅子を一つ煖爐の前に押し遣つた。

綾小路は椅背に手を掛けたが、すぐに据わらずに、あたりを見廻して、卓の上のやうべから開けた儘になつてゐる、厚い、假綴の洋書に目を著けた。傍には幅の廣い籠のやうな形をした、鼈甲の紙切小刀が置いてある。「又何か大きな物にかじり附いてゐるね。」かう云つて秀麿の顔を見ながら、腰を卸した。

綾小路は學習院を秀麿と同期で通過した男である。秀麿は大學に行くのに、綾小路は畫かきになると云つて、溜池の洋畫研究所へ通ひ始めた。それから秀麿がまだ文科にゐるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにゐた。秀麿がマルセイユから上陸して、ベルリンへ行く途中で、二三日パリイに滞在してゐた時には、親切に世話を焼いて、シャン・ゼリゼエの散歩やら、テアートル・フランセエとジムナズ・ドラマチツクとの芝居見物やら、時間を吝まらずに案内をして歩いて、ベルリンへ行つてから著る服まで誂へさせてくれた。

綾小路は目と耳とばかりで生活してゐるやうな男で、藝術をさへ餘り眞面目には取り扱つてゐないが、明敏な頭腦がいつも何物にか饑ゑてゐる。それで故郷へ歸つて以來引き籠り勝にしてゐる秀麿の方からは、尋ねても行かぬのに、折々遊びに来て、秀麿の讀んでゐる本の話、口ではちやかしながら、眞面目に聞いて考へても見るのである。

綾小路は卓の所へ歩いて行つて、開けてある本の表紙を引つ繰り返して見た。「ゼイ・フィロゾフィイ・デス・アルス・オツプか。妙な標題だなあ。」

そこへ雪が橢圓形のニツケル盆に香茶の道具を載せて持つて來た。そして小さい卓を煖爐の前へ運んで、その上に盆を置いて、綾小路の方を見ぬやうにしてちよいと見て、そつと部屋を出て行つた。何か言はれはしないだらうか。言へば又恥かしいやう

な事を言ふだらう。どんな事を言ふだらう。言はせて聞いても見たいと云ふやうな心
持で雪はゐるが、こん度は綾小路が黙つてゐた。

秀麿は伏せてあるタツスを起して茶を注いだ。そして「牛乳を入れるのだらうな」と
云つて、綾小路を顧みた。

「こなひだのやうに澤山入れなくてくれ給へ。一體アルス・オツプとはなんだい。」か
う云ひながら、綾小路は煖爐の前の椅子に掛けた。

「コム・シイキ。かのやうにとでも云つたら好いのだらう。妙な所を押しへて、考を
押し廣めて行つたものだが、不思議に僕の立場其儘を説明してくれるやうで、愉快で溜
まらないから、とう／＼ゆうべは三時まで読んでゐた。」

「三時まで。」綾小路は目を睜つた。「どうして、どこが君の立場其儘なのだ。」

「さう」と云つて、秀麿は暫く考へてゐた。千ペエジ近い本を六七分通り讀んだのだ
から、どんな風に要點を撮んで話したものかと考へたのである。「先づ本當だと云ふ
詞ことばからして考へて掛からなくてはならないね。裁判所で證據立てをして拵こしらへた判決文
を事實だと云つて、それを本當だとするのが、普通の意味の本當だらう。ところが、さ
う云ふ意味の事實と云ふものは存在しない。事實だと云つても、人間の寫象を通過した
以上は、物質論者のランゲの謂いふ湊合そうがふが加はつてゐる。意識せずに詩にしてゐる。嘘に

なつてゐる。そこで今一つの意味の本當と云ふものを立てなくてはならなくなる。小説は事實を本當とする意味に於いては嘘だ。併しこれは最初から事實がらなないで、嘘と意識して作つて、通用させてゐる。そしてその中に性命がある。價值がある。尊い神話も同じやうに出来て、通用して來たのだが、あれは最初事實がつた丈違ふ。君のかく畫も、どれ程寫生したところで、實物ではない。嘘の積りでかいてゐる。人生の性命あり、價值あるものは、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本當はこれより外には求められない。かう云ふ風に本當を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、餘程卑俗にして繰り返してゐるのも同じ事だ。これ丈の事は一寸云つて置かなくては、話が出来ないのだがね。」

「宜しい。詞はどうでも好い。その位な事は僕にも分かつてゐる。僕のかく畫だつて、實物ではないが、今年も展覽會で一枚賣れたから、慥かに多少の價值がある。だから僕の畫を本當だとするには、異議はない。そこでコム・シイはどうなるのだ。」

「まあ待ち給へ。そこで人間のあらゆる智識、あらゆる學問の根本を調べてみるのだね。一番正確だとしてある數學方面で、點だの線だのと云ふものがある。どんなに細かくぼつんと打つたつて點にはならない。どんなに細くすうつと引いたつて線にはならない。どんなに好く削つた板の縁も線にはなつてゐない。角も點にはなつてゐない。

點と線は存在しない。例の意識した嘘だ。併し點と線があるかのやうに考へなくては、幾何學は成り立たない。あるかのやうにだね。コム・シイだね。自然科學はどうだ。物質と云ふものだからが存在はしない。物質が元子から組み立てられてゐると云ふ。その元子も存在はしない。併し物質があつて、元子から組み立ててあるかのやうに考へなくては、元子量の勘定が出来ないから、化學は成り立たない。精神學の方面はどうだ。自由だの、靈魂不滅だの、義務だのは存在しない。その無いものを有るかのやうに考へなくては、倫理は成り立たない。理想と云つてゐるものはそれだ。法律の自由意志と云ふものの存在しないのも、疾とつくに分かつてゐる。併し自由意志があるかのやうに考へなくては、刑法が全部無意味になる。どんな哲學者も、近世になつては大抵世界を相待さうたいに見て、絶待ぜつたいの存在しないことを認めてはゐるが、それでも絶待があるかのやうに考へてゐる。宗教でも、もう大ぶ古くシユライエルマツヘルが神を父であるかのやうに考へると云つてゐる。孔子かうしもずつと古く祭るに在いますが如ごとくすと云つてゐる。先祖の靈があるかのやうに祭るのだ。さうして見ると、人間の智識、學問は扱さて置き、宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事實として證據立てられない或る物を建こんりふ立してゐる。即ちかのやうにが土臺よこたに横はつてゐるのだね。」

「まあ一寸待つてくれ給へ。君は僕の事を饒舌しやべる饒舌ると云ふが、君が饒舌り出して

來ると、驅足になるから、附いて行かれない。その、かのやうにと云ふ怪物の正體も、少し見え掛つては來たが、まあ、茶でももう一杯飲んで考へて見なくては、はつきりしないね。」

「もうぬるくなつたらう。」

「なに。好いよ。雪と云ふ、證據立てられる事實が間へ這入つて來ると、考へがこんがらかつて來るからね。さうすると、詰まり事實と事實がごろ／＼轉がつてゐてもしやうがない。それを結び附けて考へようとすると、厭でも或る物を土臺にしなくてはならない。その土臺が例のかのやうにだと云ふだね。宜しい。ところが、僕はそんな怪物の事は考へずに置く。考へても言はずに置く。」綾小路は生盪い香茶をぐつと飲んで、決然と言ひ放つた。

秀麿は顔を蹙めた。「それは僕も言はずにゐる。併し君は晝だけかいて、言はずにゐられようが、僕は言ふ爲めに學問をしたのだ。考へずには無論ゐられない。考へてそれを真直ぐに言はずにゐるには、黙つてしまふか、別に嘘を拵へて言はなくてはならない。それでは僕の立場がなくなつてしまふのだ。」

「併しね、君、その君が言ふ爲めに學問をしたと云ふのは、歴史を書くことだらう。僕が晝をかくやうに、怪物が土臺になつてゐても好いから、構はずに／＼書けば好

いぢやないか。」

「さうは行かないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしなくてはならないのだ。別にすると、なぜ別にする、なぜごちやくにして置かないかと云ふ疑問が起る。どうしても歴史は、畫のやうに一刹那を捉へて遣つてゐるわけには行かないのだ。」

「それでは僕のかく畫には怪物が隠れてゐるから好い。君の書く歴史には怪物が現れて來るから行けないと云ふのだね。」

「まあ、さうだ。」

「意氣地がないねえ。現れたら、どうなるのだ。」

「危険思想だと云はれる。それも世間が彼此云ふだけなら、奮闘もしよう。第一父が承知しないだらうと思ふのだ。」

「いよく、意氣地がないねえ。そんな葛藤なら、僕はもう疾づくに解決してしまつてゐる。僕は畫かきになる時、親爺が見限つてしまつて、現に高等遊民として取扱つてゐるのだ。君は歴史家になると云ふのをお父うさんが喜んで承知した。そこで大學も卒業した。洋行も僕のやうに無理をしないで、氣樂にした。君は今まで葛藤の繰延をしてゐたのだ。僕の五六年前に解決した事を、君は今解決して、好きなやうに歴史を書くが好いぢやないか。己むを得んぢやないか。」

かのやうに

「併し僕はそんな葛藤を起きさずに遣つて行かれる筈だと思つてゐる。平和な解決がひ目の前に見えてゐる。手に取られるやうに見えてゐる。それを下手へたに手に取らうとして失敗をすることなんぞは、避けたいと思つてゐる。それでぐづくしてゐて、君にまで意氣地がないと云はれるのだ。」秀磨は溜息ためいきを衝ついた。

「ふん、どうしてお父うさんを納得させようと云ふのだ。」

「僕の思想が危険思想でもなんでもない」と云ふことを言つて聞せさへすれば好いのだが。」

「どう言つて聞せるね。僕がお父うさんだと思つて、そこで一つ言つて見給へ。」

「困るなあ」と云つて、秀磨は立つて、室内をあちこち歩き出した。

晷ひかげはもうエランダの檐のきを越して、屋根の上に移つてしまつた。眞まつ蒼さをに澄み切つた、まだ秋らしい空の色がエランダの硝子戸を青玉せいぎょくのやうに染めたのが、窓越しに少し翳かすんで見えてゐる。山の手の日曜日のの寂しさが、大ぶ廣い此邸の庭に、田舎の別荘めいた感じを與へる。突然自動車が一臺煉瓦塀れんがべいの外をけたたましく過ぎて、跡は又元の寂しさに戻つた。

秀磨は語を續つゐだ。「まあ、かうだ。君がさつきから怪物々と云つてゐる、その、かのやうにだがね。あれは決して怪物ではない。かのやうにがなくては、學問もなけ

かのやうに

れば、藝術もない、宗教もない。人生のあらゆる價値のあるものは、かのやうにを中心にしてゐる。昔の人が人格のある單數の神や、複數の神の存在を信じて、その前に頭を屈めたやうに、僕はかのやうの前に敬虔に頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切つた、純潔な感情なのだ。道德だつてさうだ。義務が事實として證據立てられるものでないと云ふこと丈分かつて、怪物扱ひ、幽靈扱ひにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣に堪へない。破壊は免るべからざる破壊かも知れない。併しその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かなやうな外觀のものではあるが、底にはかのやうに儼乎として存立してゐる。人間は飽くまでも義務があるかのやうに行はなくてはならない。僕はさう行つて行く積りだ。人間が猿から出來たと云ふのは、あれは事實問題で、事實として證明しようと掛かつてゐるのだから、ヒポテジスであつて、かのやうにはないが、進化の根本思想は矢張かのやうにだ。生類は進化するかのやうにしか考へられない。僕は人間の前途に光明を見て進んで行く。祖先の靈があるかのやうに背後を顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのやうに、徳義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く。さうして見れば、僕は事實上極意味な、極從順な、山の中の百姓と、なんの擇ぶ所もない。只頭がぼんやりしてゐない丈だ。極頑固な、極篤實な、敬神家や道學先生と、なんの擇ぶ所もない。只頭がごつく／＼してゐない丈だ。

ねえ、君、この位安全な、危険でない思想はないぢやないか。神が事實でない。義務が事實でない。これはどうしても今日になつて認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして、神を瀆す。義務を蹂躪する。そこに危険は始て生じる。行爲は勿論、思想まで、さう云ふ危険な事は十分撲滅しようとするが好い。併しそんな奴の出で來たのを見て、天國を信ずる昔に戻さう、地球が動かずゐて、太陽が巡回してゐると思ふ昔に戻さうとしたつて、それは不可能だ。さうするには大學も何も潰してしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔首を愚にしないでならない。それは不可能だ。どうしても、かのやうにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。」

これまで例の口の端の括弧を二重三重にして、妙な微笑を顔に湛へて、葉卷の烟を吹きながら聞いてゐた綾小路は、煙草の灰を灰皿に叩き落して、身を起しながら、「駄目だ」と、簡単に一言云つて、煖爐を背にして立つた。そしてめまぐるしく歩き廻りながら饒舌つてゐる秀麿を、冷やかに見てゐる。

秀麿は綾小路の正面に立ち止まつて相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぼつと赤くなつて、その目の奥にはフアナチスムの火に似た、一種の光がある。「なぜ。なぜ駄目だ。」

「なぜつて知れてゐるぢやないか。人に君のやうな考になれと云つたつて、誰がなる

かのやうに

ものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ當て、先祖の幽靈が盆にのこく歩いて來ると思つてゐる。道學先生は義務の發電所のやうなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教はつた師匠がその電氣を取り續いで、自分に掛けてくれて、そのお蔭で自分が生涯ぴり／＼と動いてゐるやうに思つてゐる。みんな手應のあるものを向うに見てゐるから、崇拜も出來れば、遵奉も出來るのだ。人に僕のかいた裸體畫を一枚遣つて、女房を持たずにゐろ、けしからん所へ往かずゐろ、これを生きた女であるかのやうに思へと云つたつて、聴くものか。君のかのやうにはそれだ。」

「そんなら君はどうしてゐる。幽靈がのこく歩いて來ると思ふのか。電氣を掛けられてゐると思ふのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思ふ。」

「どうも思はずにゐる。」

「思はずにゐられるか。」

「さうさね。丸で思はない事もない。併しなる丈思はないやうにしてゐる。極めずに置く。畫をかくには極めなくても好いからね。」

「そんなら君が假に僕の地位に立つて、歴史を書かなくてはならないとなつたら、ど

うする。」

「僕は歴史を書かなくてはならないやうな地位には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、平氣な、殆ど不愛想な表情になつてゐる。

秀麿は氣拔けがしたやうに、兩手を力なく垂れて、こん度は自分が寂しく微笑んだ。「さうだね。てんでに自分の職業を遣つて、そんな問題はそつとして置くのだらう。僕は職業の選びやうが悪かつた。ほんやりして遣つたり、嘘を衝いてやれば造做はないが、正直に、眞面目に遣らうとすると、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ。」

綾小路の目は一刹那鋼鐵の様に光つた。「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」

秀麿は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のやうな口吻で、聲低く云つた。「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云つた。

綾小路は背をあぶるやうに、煖爐に太つた體を近づけて、兩手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになつて立ち、秀麿はその二三歩前に、瘦せた、しなやかな體を、まだこれから延びようとする今年竹のやうに、眞つ直にして立ち、二人は目と目を見合はせて、

かのやうに

良久^やしく黙^{もく}つてゐる。山の手の日曜日の寂^{さび}しさが、二人の周囲を依然支配^ししてゐる。

(明治四十五年一月)